

正誤表

書名

令和5年1月 鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物） 第IV編 支承構造

頁	項目	誤	正	対象刷
84	式（解 8.7.1） lrd,lrh	l_{rd}, l_{rh} ：ストッパー外縁から補強鉄筋までの距離	l_{rd}, l_{rh} ： l_{rd} は鋼角ストッパー前面または鋼棒ストッパー中心から補強鉄筋までの距離， l_{rh} はストッパー外縁から補強鉄筋までの距離． …	1刷
181	式 (1)lrd,lrh	l_{rd}, l_{rh} ：ストッパー外縁から補強鉄筋までの距離	l_{rd} ：鋼角ストッパー前面または鋼棒ストッパー中心から補強鉄筋までの距離 l_{rh} ：ストッパー外縁から補強鉄筋までの距離	1刷

以上，2025年2月28日追加（第5報）

正誤表

書名

令和5年1月 鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物） 第Ⅳ編 支承構造

頁	項目	誤	正	対象刷																																																				
43	解説表 7.2.1	解説表 7.2.1 支承部の設計水平力の算定式 (a) 常 時 <table><tr><th>方向</th><th>対象とする支承</th><th>設計水平力の算定式 (H_d：一支承線上の合計の設計水平力、$H_{d,j}$：支承 j の設計水平力)</th></tr><tr><td rowspan="2">橋軸方向</td><td>固定側</td><td>$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$ 安全側のため、可動側の水平力を考慮しない場合もある。 $H_d = \mu_m \cdot R_m$</td></tr><tr><td>可動側</td><td>ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq \frac{H_d}{p}$</td></tr><tr><td>橋軸直角方向</td><td>固定側、可動側共通</td><td>$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq \frac{H_d}{p}$</td></tr></table> (b) 地震時 <table><tr><th>方向</th><th>対象とする支承</th><th>設計水平力の算定式 (H_d：一支承線上の合計の設計水平力、$H_{d,j}$：支承 j の設計水平力)</th></tr><tr><td rowspan="4">橋軸方向</td><td>固定側</td><td>$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$</td></tr><tr><td>可動支承のあき > 移動量</td><td>$H_d = \mu_m \cdot R_m \geq \frac{H_{d0}}{n}$ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$</td></tr><tr><td>可動支承のあき ≤ 移動量</td><td>固定側 $H_d = H_{d0}$ 可動側 $H_d = k \cdot \frac{H_{d0}}{n}$</td></tr><tr><td>可動側</td><td>同上</td></tr><tr><td>橋軸直角方向</td><td>固定側、可動側共通</td><td>$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$</td></tr></table> 注) 表中の記号の意味は以下のとおり。 H_{d0}、H_{d0}：桁全体が受ける設計水平力（橋軸方向、橋軸直角方向）で、常時の場合は桁の構造解析から直接算定し、地震時の場合は次式により算定する。 $H_{d0} = K_{\text{max}}(C) \times W_0 + K_{d0} \times W_L$ $H_{d0} = K_{\text{max}}(C) \times W_0 + K_{d0} \times W_L$ ここに、K_{max}：橋脚、橋台の最大応答係数で、添え字 L は橋軸方向、C は橋軸直角方向を表す。 K_{d0}：列車荷重に考慮する震度で、橋軸方向は $K_{\text{max}}(C)$ と 0.2 の小さい方、橋軸直角方向は $K_{\text{max}}(C)$ と 0.3 のうち小さい方の値 W_L：桁全体の自重 W_L：地震時に桁上に載荷される列車荷重 H_{d0}：一支承線上の支承 j における設計水平力（橋軸直角方向）で、上式において、W_0、W_L は死荷重、列車荷重による支承 j の鉛直反力を用いて算定する。 n：桁全体を支持する支点の数（単純桁の場合 $n=2$、連続桁の場合 $n \geq 3$）。なお、固定・可動構造の連続桁の場合、可動側の支点数は $n-1$ とする。 p：一支承線上の支承の数 μ_m：可動側のせん断抵抗係数（ゴム支承のせん断抵抗係数、摩擦係数等）で、支承本体の特性に応じて定める（「B.8.2 固定・可動」の区別がある支承方式とする場合の設計水平力」。「B.8 設計応答値」参照）。 R_m：可動支点の鉛直反力 R_{m0}：可動支点の支承 j の鉛直反力 k：各個橋脚の影響による増増係数で、おぼろげなくい性質的な破壊を示す構造について、必要に応じて 1.0 より大きい数値を設定（該当しない場合は 1.0）。$k > 1.0$ の設定例として、側面支承について「B.8 設計応答値」に示している。	方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)	橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$ 安全側のため、可動側の水平力を考慮しない場合もある。 $H_d = \mu_m \cdot R_m$	可動側	ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq \frac{H_d}{p}$	橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq \frac{H_d}{p}$	方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)	橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$	可動支承のあき > 移動量	$H_d = \mu_m \cdot R_m \geq \frac{H_{d0}}{n}$ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$	可動支承のあき ≤ 移動量	固定側 $H_d = H_{d0}$ 可動側 $H_d = k \cdot \frac{H_{d0}}{n}$	可動側	同上	橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$	解説表 7.2.1 支承部の設計水平力の算定式 (a) 常 時 <table><tr><th>方向</th><th>対象とする支承</th><th>設計水平力の算定式 (H_d：一支承線上の合計の設計水平力、$H_{d,j}$：支承 j の設計水平力)</th></tr><tr><td rowspan="2">橋軸方向</td><td>固定側</td><td>$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$ 安全側のため、可動側の水平力を考慮しない場合もある。 $H_d = \mu_m \cdot R_m \geq 0.1 \cdot \frac{H_{d0}}{n}$ ※ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq \frac{H_d}{p}$</td></tr><tr><td>可動側</td><td>同上</td></tr><tr><td>橋軸直角方向</td><td>固定側、可動側共通</td><td>$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq \frac{H_d}{p}$</td></tr></table> (b) 地震時 <table><tr><th>方向</th><th>対象とする支承</th><th>設計水平力の算定式 (H_d：一支承線上の合計の設計水平力、$H_{d,j}$：支承 j の設計水平力)</th></tr><tr><td rowspan="4">橋軸方向</td><td>固定側</td><td>$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$</td></tr><tr><td>可動支承のあき > 移動量</td><td>$H_d = \mu_m \cdot R_m \geq 0.1 \cdot \frac{H_{d0}}{n}$ ※ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$</td></tr><tr><td>可動支承のあき ≤ 移動量</td><td>固定側 $H_d = H_{d0}$ 可動側 $H_d = k \cdot \frac{H_{d0}}{n}$</td></tr><tr><td>可動側</td><td>同上</td></tr><tr><td>橋軸直角方向</td><td>固定側、可動側共通</td><td>$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$</td></tr></table> 注) 表中の記号の意味は以下のとおり。 H_{d0}、H_{d0}：桁全体が受ける設計水平力（橋軸方向、橋軸直角方向）で、常時の場合は桁の構造解析から直接算定し、地震時の場合は次式により算定する。 $H_{d0} = K_{\text{max}}(C) \times W_0 + K_{d0} \times W_L$ $H_{d0} = K_{\text{max}}(C) \times W_0 + K_{d0} \times W_L$ ここに、K_{max}：橋脚、橋台の最大応答係数で、添え字 L は橋軸方向、C は橋軸直角方向を表す。 K_{d0}：列車荷重に考慮する震度で、橋軸方向は $K_{\text{max}}(C)$ と 0.2 の小さい方、橋軸直角方向は $K_{\text{max}}(C)$ と 0.3 のうち小さい方の値 W_L：桁全体の自重 W_L：地震時に桁上に載荷される列車荷重 H_{d0}：一支承線上の支承 j における設計水平力（橋軸直角方向）で、上式において、W_0、W_L は死荷重、列車荷重による支承 j の鉛直反力を用いて算定する。 n：桁全体を支持する支点の数（単純桁の場合 $n=2$、連続桁の場合 $n \geq 3$）。なお、固定・可動構造の連続桁の場合、可動側の支点数は $n-1$ とする。 p：一支承線上の支承の数 μ_m：可動側のせん断抵抗係数（ゴム支承のせん断抵抗係数、摩擦係数等）で、支承本体の特性に応じて定める（「B.8.2 固定・可動」の区別がある支承方式とする場合の設計水平力」。「B.8 設計応答値」参照）。 R_m：可動支点の鉛直反力 R_{m0}：可動支点の支承 j の鉛直反力 k：各個橋脚の影響による増増係数で、おぼろげなくい性質的な破壊を示す構造について、必要に応じて 1.0 より大きい数値を設定（該当しない場合は 1.0）。$k > 1.0$ の設定例として、側面支承について「B.8 設計応答値」に示している。 ※ [] 内は、ゴム支承とスリッパを用いた支承部のゴム支承に適用する（「B.8 設計応答値」）。	方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)	橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$ 安全側のため、可動側の水平力を考慮しない場合もある。 $H_d = \mu_m \cdot R_m \geq 0.1 \cdot \frac{H_{d0}}{n}$ ※ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq \frac{H_d}{p}$	可動側	同上	橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq \frac{H_d}{p}$	方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)	橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$	可動支承のあき > 移動量	$H_d = \mu_m \cdot R_m \geq 0.1 \cdot \frac{H_{d0}}{n}$ ※ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$	可動支承のあき ≤ 移動量	固定側 $H_d = H_{d0}$ 可動側 $H_d = k \cdot \frac{H_{d0}}{n}$	可動側	同上	橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$	1 刷
方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)																																																						
橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$ 安全側のため、可動側の水平力を考慮しない場合もある。 $H_d = \mu_m \cdot R_m$																																																						
	可動側	ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq \frac{H_d}{p}$																																																						
橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq \frac{H_d}{p}$																																																						
方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)																																																						
橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$																																																						
	可動支承のあき > 移動量	$H_d = \mu_m \cdot R_m \geq \frac{H_{d0}}{n}$ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$																																																						
	可動支承のあき ≤ 移動量	固定側 $H_d = H_{d0}$ 可動側 $H_d = k \cdot \frac{H_{d0}}{n}$																																																						
	可動側	同上																																																						
橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$																																																						
方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)																																																						
橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$ 安全側のため、可動側の水平力を考慮しない場合もある。 $H_d = \mu_m \cdot R_m \geq 0.1 \cdot \frac{H_{d0}}{n}$ ※ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq \frac{H_d}{p}$																																																						
	可動側	同上																																																						
橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq \frac{H_d}{p}$																																																						
方向	対象とする支承	設計水平力の算定式 (H_d ：一支承線上の合計の設計水平力、 $H_{d,j}$ ：支承 j の設計水平力)																																																						
橋軸方向	固定側	$H_d = H_{d0} - \sum_{m=1}^{n-1} \left(\frac{1}{2} \mu_m \cdot R_{m0} \right) \geq \frac{H_{d0}}{n}$																																																						
	可動支承のあき > 移動量	$H_d = \mu_m \cdot R_m \geq 0.1 \cdot \frac{H_{d0}}{n}$ ※ ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = \mu_m \cdot R_{m0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$																																																						
	可動支承のあき ≤ 移動量	固定側 $H_d = H_{d0}$ 可動側 $H_d = k \cdot \frac{H_{d0}}{n}$																																																						
	可動側	同上																																																						
橋軸直角方向	固定側、可動側共通	$H_d : H_{d0}$ を鉛直反力比またはスパン比で分担させた値のうち大きい方 ただし、一支承線上の各支承で鉛直反力が均等とならない場合は、支承 j の設計水平力 $H_{d,j}$ は次式とする。 $H_{d,j} = H_{d0} \geq k \cdot \frac{H_d}{p}$																																																						

以上、2024年7月19日追加（第4報）

正誤表

書名

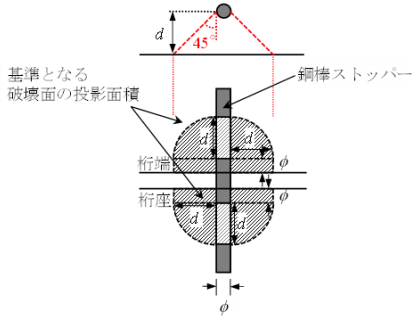
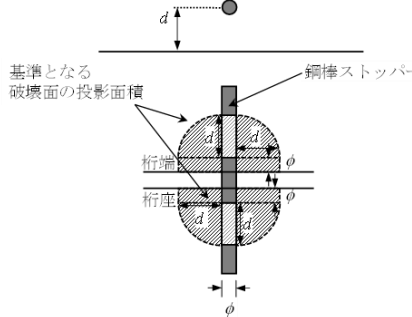
令和5年1月 鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物） 第Ⅳ編 支承構造

頁	項目	誤	正	対象刷																																																																																																												
66	解説表 8.5.2	解説表 8.5.2 安全係数の標準的な値（ゴム支承およびストッパー） <table><tr><th rowspan="3">要求性能</th><th rowspan="3">安全係数</th><th rowspan="3">作用係数 γ_f</th><th rowspan="3">応答値係数 γ_e</th><th colspan="2">材料係数 γ_m</th><th rowspan="3">限界値係数 γ_l</th><th rowspan="3">構造物係数 γ_o</th></tr><tr><th>γ_c</th><th>γ_s</th></tr><tr><th colspan="2">部材係数 γ_m</th></tr><tr><td>安全性（構造安全性） 常時</td><td></td><td></td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1} 1.05^{*2}</td><td>1.0 1.1^{*3} 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.2</td></tr><tr><td>安全性（構造安全性） 地震時</td><td></td><td></td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1}</td><td>1.0 1.1^{*3} 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0</td></tr><tr><td>使用性（外観）</td><td rowspan="4">解説表 8.5.1 による</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td></tr><tr><td>使用性（保守） 常時</td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1} 1.05^{*2}</td><td>1.0 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0~1.2</td></tr><tr><td>使用性（保守） 地震時</td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1}</td><td>1.0 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0</td></tr><tr><td>復旧性（修復性）</td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1}</td><td>1.0 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0</td></tr></table> *1 ストッパーに使用する鋼材に適用する。 *2 補強鉄筋の設計引張応力強度f_{tk}の算定に適用する。 *3 中道コンクリートがある場合の鋼角ストッパーの曲げ耐力の算定に適用する。 *4 式（解 8.7.1）に示す補強鉄筋を用いない場合の桁座・桁端部込み部の設計水平耐力P_{h0}の算定に適用する。 *5 式（解 8.7.1）に示す補強鉄筋により受け持たれる桁座・桁端部込み部の設計水平耐力P_{h1}の算定に適用する。	要求性能	安全係数	作用係数 γ_f	応答値係数 γ_e	材料係数 γ_m		限界値係数 γ_l	構造物係数 γ_o	γ_c	γ_s	部材係数 γ_m		安全性（構造安全性） 常時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.2	安全性（構造安全性） 地震時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0	使用性（外観）	解説表 8.5.1 による	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	使用性（保守） 常時	1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0~1.2	使用性（保守） 地震時	1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0	復旧性（修復性）	1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0	解説表 8.5.2 安全係数の標準的な値（ゴム支承およびストッパー） <table><tr><th rowspan="3">要求性能</th><th rowspan="3">安全係数</th><th rowspan="3">作用係数 γ_f</th><th rowspan="3">応答値係数 γ_e</th><th colspan="2">材料係数 γ_m</th><th rowspan="3">限界値係数 γ_l</th><th rowspan="3">構造物係数 γ_o</th></tr><tr><th>γ_c</th><th>γ_s</th></tr><tr><th colspan="2">部材係数 γ_m</th></tr><tr><td>安全性（構造安全性） 常時</td><td></td><td></td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1} 1.05^{*2}</td><td>1.0 1.1^{*3} 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0~1.2</td></tr><tr><td>安全性（構造安全性） 地震時</td><td></td><td></td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1}</td><td>1.0 1.1^{*3} 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0</td></tr><tr><td>使用性（外観）</td><td rowspan="4">解説表 8.5.1 による</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td><td>1.0</td></tr><tr><td>使用性（保守） 常時</td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1} 1.05^{*2}</td><td>1.0 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0~1.2</td></tr><tr><td>使用性（保守） 地震時</td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1}</td><td>1.0 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0</td></tr><tr><td>復旧性（修復性）</td><td>1.0</td><td>1.3</td><td>1.0 1.05^{*1}</td><td>1.0 1.3^{*4} 1.1^{*5}</td><td>1.0</td></tr></table> *1 ストッパーに使用する鋼材に適用する。 *2 補強鉄筋の設計引張応力強度f_{tk}の算定に適用する。 *3 中道コンクリートがある場合の鋼角ストッパーの曲げ耐力の算定に適用する。 *4 式（解 8.7.1）に示す補強鉄筋を用いない場合の桁座・桁端部込み部の設計水平耐力P_{h0}の算定に適用する。 *5 式（解 8.7.1）に示す補強鉄筋により受け持たれる桁座・桁端部込み部の設計水平耐力P_{h1}の算定に適用する。	要求性能	安全係数	作用係数 γ_f	応答値係数 γ_e	材料係数 γ_m		限界値係数 γ_l	構造物係数 γ_o	γ_c	γ_s	部材係数 γ_m		安全性（構造安全性） 常時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0~1.2	安全性（構造安全性） 地震時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0	使用性（外観）	解説表 8.5.1 による	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	使用性（保守） 常時	1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0~1.2	使用性（保守） 地震時	1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0	復旧性（修復性）	1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0	1 刷
要求性能	安全係数	作用係数 γ_f					応答値係数 γ_e	材料係数 γ_m			限界値係数 γ_l	構造物係数 γ_o																																																																																																				
								γ_c					γ_s																																																																																																			
			部材係数 γ_m																																																																																																													
安全性（構造安全性） 常時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.2																																																																																																									
安全性（構造安全性） 地震時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0																																																																																																									
使用性（外観）	解説表 8.5.1 による	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0																																																																																																									
使用性（保守） 常時		1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0~1.2																																																																																																										
使用性（保守） 地震時		1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0																																																																																																										
復旧性（修復性）		1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0																																																																																																										
要求性能	安全係数	作用係数 γ_f	応答値係数 γ_e	材料係数 γ_m		限界値係数 γ_l	構造物係数 γ_o																																																																																																									
				γ_c	γ_s																																																																																																											
				部材係数 γ_m																																																																																																												
安全性（構造安全性） 常時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0~1.2																																																																																																									
安全性（構造安全性） 地震時			1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.1 ^{*3} 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0																																																																																																									
使用性（外観）	解説表 8.5.1 による	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0																																																																																																									
使用性（保守） 常時		1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1} 1.05 ^{*2}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0~1.2																																																																																																										
使用性（保守） 地震時		1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0																																																																																																										
復旧性（修復性）		1.0	1.3	1.0 1.05 ^{*1}	1.0 1.3 ^{*4} 1.1 ^{*5}	1.0																																																																																																										
70	8.5.4.1	（1）構造安全性の照査は、「8.5.3.1 ストッパーの照査」（4）…	（1）構造安全性の照査は、「8.5.3.1 ストッパーの照査」（3）…	1 刷																																																																																																												
73	8.6.3(2)(a)(i)	α ：… 連続桁式橋りょうの支承等で、ゴム支承の分担率 α_i が l/n と大きく異なる場合は、加途、分散率の設定の検討を行うものとする。 α_i ：ゴム支承の分担率	α ：… α_i ：ゴム支承の分担率。連続桁式橋りょうの支承等で、ゴム支承の分担率 α_i が l/n と大きく異なる場合は、加途、分散率の設定の検討を行うものとする。	1 刷																																																																																																												
84	式（解 8.7.1） l_{rd}, l_{rh}	l_{rd}, l_{rh}：ストッパ外縁から補強鉄筋までの距離。	l_{rd}, l_{rh}：鋼棒ストッパ中心または鋼角ストッパ前面から補強鉄筋までの距離。 ※ 2025 年 2 月 28 日追加（第 5 報）参照	1 刷																																																																																																												

正誤表

書名

令和5年1月 鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物） 第Ⅳ編 支承構造

頁	項目	誤	正	対象刷																								
87	解説図 8.7.6	 解説図 8.7.6 桁座・桁端の表面部近傍に集中するコンクリートの圧縮応力による破壊面	 解説図 8.7.6 桁座・桁端の表面部近傍に集中するコンクリートの圧縮応力による破壊面	1 刷																								
181	式(1) l_{rd}, l_{rh}	$l_{rd}, l_{rh} \div$ ストッパー 外縁から補強鉄筋までの距離	$l_{rd}, l_{rh} \div$ 鋼棒ストッパー 中心または鋼角ストッパー 前面から補強鉄筋までの距離 ※ 2025 年 2 月 28 日追加（第 5 報）参照	1 刷																								
183	付属表 8-1.1(c)	<table><tr><th colspan="2">(c) 鋼棒ストッパーの桁端・桁座埋込み部</th></tr><tr><td>鋼棒の直径 ϕ</td><td>100 mm</td></tr><tr><td>鋼棒ストッパー中心から桁座・桁端縁端までの距離 d</td><td>200～350 mm</td></tr><tr><td>コンクリートの圧縮強度 f'_c</td><td>32.6 N/mm²</td></tr><tr><td>$\sqrt{l_{rd}/l_{rh}}$</td><td>2.6</td></tr><tr><td>鉄筋の降伏耐力 $H_r = A_r \cdot f_{sy} \cdot \cos \theta_r$</td><td>86～692 kN</td></tr></table>	(c) 鋼棒ストッパーの桁端・桁座埋込み部		鋼棒の直径 ϕ	100 mm	鋼棒ストッパー中心から桁座・桁端縁端までの距離 d	200～350 mm	コンクリートの圧縮強度 f'_c	32.6 N/mm ²	$\sqrt{l_{rd}/l_{rh}}$	2.6	鉄筋の降伏耐力 $H_r = A_r \cdot f_{sy} \cdot \cos \theta_r$	86～692 kN	<table><tr><th colspan="2">(c) 鋼棒ストッパーの桁端・桁座埋込み部</th></tr><tr><td>鋼棒の直径 ϕ</td><td>100 mm</td></tr><tr><td>鋼棒ストッパー中心から桁座・桁端縁端までの距離 d</td><td>200～350 mm</td></tr><tr><td>コンクリートの圧縮強度 f'_c</td><td>32.6 N/mm²</td></tr><tr><td>$\sqrt{l_{rd}/l_{rh}}$</td><td>3.4</td></tr><tr><td>鉄筋の降伏耐力 $H_r = A_r \cdot f_{sy} \cdot \cos \theta_r$</td><td>86～692 kN</td></tr></table>	(c) 鋼棒ストッパーの桁端・桁座埋込み部		鋼棒の直径 ϕ	100 mm	鋼棒ストッパー中心から桁座・桁端縁端までの距離 d	200～350 mm	コンクリートの圧縮強度 f'_c	32.6 N/mm ²	$\sqrt{l_{rd}/l_{rh}}$	3.4	鉄筋の降伏耐力 $H_r = A_r \cdot f_{sy} \cdot \cos \theta_r$	86～692 kN	1 刷
(c) 鋼棒ストッパーの桁端・桁座埋込み部																												
鋼棒の直径 ϕ	100 mm																											
鋼棒ストッパー中心から桁座・桁端縁端までの距離 d	200～350 mm																											
コンクリートの圧縮強度 f'_c	32.6 N/mm ²																											
$\sqrt{l_{rd}/l_{rh}}$	2.6																											
鉄筋の降伏耐力 $H_r = A_r \cdot f_{sy} \cdot \cos \theta_r$	86～692 kN																											
(c) 鋼棒ストッパーの桁端・桁座埋込み部																												
鋼棒の直径 ϕ	100 mm																											
鋼棒ストッパー中心から桁座・桁端縁端までの距離 d	200～350 mm																											
コンクリートの圧縮強度 f'_c	32.6 N/mm ²																											
$\sqrt{l_{rd}/l_{rh}}$	3.4																											
鉄筋の降伏耐力 $H_r = A_r \cdot f_{sy} \cdot \cos \theta_r$	86～692 kN																											

以上，2024年6月21日追加（第3報）

正誤表

書名

令和5年1月 鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物） 第Ⅳ編 支承構造

頁	項目	誤	正	対象刷
85	8.7.2.2 解説	A_r ：・・・に配置される補強鉄筋	A_r ：・・・に配置される補強鉄筋の断面積	1刷

以上，2023年8月4日追加（第2報）

正誤表

書名

令和5年1月 鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物） 第IV編 支承構造

頁	項目	誤	正	対象刷																																																																						
68	8.5.2.1 解説 (2) について 1 行目	照査桁等のたわみ・・・	桁等のたわみ・・・	1 刷																																																																						
133	解説表 10.5.1	解説表 10.5.1 ゴム支承による水平力分散構造および免震構造の支承部に対する設計作用の組合せの例 <table border="1"> <thead> <tr> <th>支承部の種類</th><th>要求性能</th><th>性能項目</th><th>限界状態</th><th>設計作用の組合せ</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">支承本体（積層ゴム支承、鉛プラグ入り積層ゴム支承、高減衰積層ゴム支承等）</td><td>安全性^{※2}</td><td>構造安全性</td><td>破壊</td><td>$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)</td></tr> <tr> <td>使用性</td><td>保守</td><td>損傷</td><td>$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + C$……………圧縮応力、引張応力、圧縮変形量（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + B + L_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)</td></tr> <tr> <td>復旧性</td><td>修復性</td><td>損傷</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)</td></tr> <tr> <td>安全性^{※3}</td><td>構造安全性</td><td>破壊</td><td>（横軸方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.1B + [L_0]$ $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + [B] + 1.1L_0$ （横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L + I + C]$ ^{※4} + 1.1L₀ + [W] $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.2W$ （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$</td></tr> <tr> <td rowspan="3">移動制限装置</td><td>使用性</td><td>保守</td><td>損傷</td><td>$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + S_0 + C_6 + T + L + I + C$……………板ばねの応力、たわみ（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + I + B + L_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + W$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$) （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + E_0$</td></tr> <tr> <td>復旧性</td><td>修復性</td><td>損傷</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$</td></tr> <tr> <td>安全性</td><td>構造安全性</td><td>変位・変形の限界</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq$ 桁座寸法 δ_{m0})</td></tr> </tbody> </table>	支承部の種類	要求性能	性能項目	限界状態	設計作用の組合せ	支承本体（積層ゴム支承、鉛プラグ入り積層ゴム支承、高減衰積層ゴム支承等）	安全性 ^{※2}	構造安全性	破壊	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + C$ ……………圧縮応力、引張応力、圧縮変形量（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)	安全性 ^{※3}	構造安全性	破壊	（横軸方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.1B + [L_0]$ $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + [B] + 1.1L_0$ （横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L + I + C]$ ^{※4} + 1.1L ₀ + [W] $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.2W$ （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$	移動制限装置	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + S_0 + C_6 + T + L + I + C$ ……………板ばねの応力、たわみ（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + W$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$) （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + E_0$	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$	安全性	構造安全性	変位・変形の限界	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq$ 桁座寸法 δ_{m0})	解説表 10.5.1 ゴム支承による水平力分散構造および免震構造の支承部に対する設計作用の組合せの例 <table border="1"> <thead> <tr> <th>支承部の種類</th><th>要求性能</th><th>性能項目</th><th>限界状態</th><th>設計作用の組合せ</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">支承本体（積層ゴム支承、鉛プラグ入り積層ゴム支承、高減衰積層ゴム支承等）</td><td>安全性^{※2}</td><td>構造安全性</td><td>破壊</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)</td></tr> <tr> <td>使用性</td><td>保守</td><td>損傷</td><td>$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + C$……………圧縮応力、引張応力、圧縮変形量（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + B + L_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)</td></tr> <tr> <td>復旧性</td><td>修復性</td><td>損傷</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)</td></tr> <tr> <td>安全性^{※3}</td><td>構造安全性</td><td>破壊</td><td>（横軸方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.1B + [L_0]$ $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + [B] + 1.1L_0$ （横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L + I + C]$ ^{※4} + 1.1L₀ + [W] $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.2W$ （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$</td></tr> <tr> <td rowspan="3">移動制限装置</td><td>使用性</td><td>保守</td><td>損傷</td><td>$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + S_0 + C_6 + T + L + I + C$……………板ばねの応力、たわみ（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + I + B + L_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + W$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$) （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + E_0$</td></tr> <tr> <td>復旧性</td><td>修復性</td><td>損傷</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$</td></tr> <tr> <td>安全性</td><td>構造安全性</td><td>変位・変形の限界</td><td>$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq$ 桁座寸法 δ_{m0})</td></tr> </tbody> </table>	支承部の種類	要求性能	性能項目	限界状態	設計作用の組合せ	支承本体（積層ゴム支承、鉛プラグ入り積層ゴム支承、高減衰積層ゴム支承等）	安全性 ^{※2}	構造安全性	破壊	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + C$ ……………圧縮応力、引張応力、圧縮変形量（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)	安全性 ^{※3}	構造安全性	破壊	（横軸方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.1B + [L_0]$ $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + [B] + 1.1L_0$ （横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L + I + C]$ ^{※4} + 1.1L ₀ + [W] $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.2W$ （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$	移動制限装置	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + S_0 + C_6 + T + L + I + C$ ……………板ばねの応力、たわみ（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + W$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$) （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + E_0$	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$	安全性	構造安全性	変位・変形の限界	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq$ 桁座寸法 δ_{m0})	1 刷
支承部の種類	要求性能	性能項目	限界状態	設計作用の組合せ																																																																						
支承本体（積層ゴム支承、鉛プラグ入り積層ゴム支承、高減衰積層ゴム支承等）	安全性 ^{※2}	構造安全性	破壊	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)																																																																						
	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + C$ ……………圧縮応力、引張応力、圧縮変形量（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)																																																																						
	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)																																																																						
	安全性 ^{※3}	構造安全性	破壊	（横軸方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.1B + [L_0]$ $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + [B] + 1.1L_0$ （横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L + I + C]$ ^{※4} + 1.1L ₀ + [W] $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.2W$ （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$																																																																						
移動制限装置	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + S_0 + C_6 + T + L + I + C$ ……………板ばねの応力、たわみ（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + W$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$) （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + E_0$																																																																						
	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$																																																																						
	安全性	構造安全性	変位・変形の限界	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq$ 桁座寸法 δ_{m0})																																																																						
支承部の種類	要求性能	性能項目	限界状態	設計作用の組合せ																																																																						
支承本体（積層ゴム支承、鉛プラグ入り積層ゴム支承、高減衰積層ゴム支承等）	安全性 ^{※2}	構造安全性	破壊	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)																																																																						
	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + C$ ……………圧縮応力、引張応力、圧縮変形量（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + P_3 + [S_0 + C_6 + T] + L + E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)																																																																						
	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$)																																																																						
	安全性 ^{※3}	構造安全性	破壊	（横軸方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.1B + [L_0]$ $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + [B] + 1.1L_0$ （横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L + I + C]$ ^{※4} + 1.1L ₀ + [W] $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.2W$ （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$																																																																						
移動制限装置	使用性	保守	損傷	$\cdot D_1 + D_2 + P_3 + S_0 + C_6 + T + L + I + C$ ……………板ばねの応力、たわみ（横軸方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + I + B + L_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 0.7 \Sigma L$) $\cdot D_1 + D_2 + W$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq 2.5 \Sigma L$) （横軸方向および横軸直角方向） $\cdot D_1 + D_2 + L + E_0$																																																																						
	復旧性	修復性	損傷	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + [L] + 1.0E_0$																																																																						
	安全性	構造安全性	変位・変形の限界	$\cdot 1.0D_1 + 1.0D_2 + 1.0P_3 + [S_0 + C_6 + T] + [L] + 1.0E_0$ ……………移動量 $\Delta m_1 + \Delta m_2$ ($\leq$ 桁座寸法 δ_{m0})																																																																						

以上、2023年6月16日追加（第1報）